

「新版 固体の電子論」への補足

この「補足」では、本の中で記すには余りに計算が長くなるために省略し、結論のみを記した部分について、計算の筋道を説明する。

1 微視的に見たフェルミ流体 (3.2.3 節) 式 (3.53) と式 (3.54)

式 (3.53) は、次のように、式 (3.52) の \mathbf{k}_1 と \mathbf{k}_2 の和を積分に直して、積分を実行すると得られる。まず、式 (3.52) の和

$$\frac{1}{\Omega} \sum_{\mathbf{k}_1 \mathbf{k}_2} \frac{n_1}{\varepsilon_2 - \varepsilon_1} \delta_{\mathbf{k}_F + \mathbf{k}_2, \mathbf{k}'_F + \mathbf{k}_1} \quad (1)$$

に $\varepsilon_i = \hbar^2 \mathbf{k}_i^2 / 2m$ ($i = 1, 2$) を代入し、 \mathbf{k}_2 の和はデルタ関数を利用し、 \mathbf{k}_1 の和を積分に直すと

$$\frac{1}{\Omega} \sum_{\mathbf{k}_1 \mathbf{k}_2} \frac{n_1}{\varepsilon_2 - \varepsilon_1} \delta_{\mathbf{k}_F + \mathbf{k}_2, \mathbf{k}'_F + \mathbf{k}_1} = \frac{2m}{\hbar^2} \int \frac{d\mathbf{k}_1}{(2\pi)^3} \frac{n_1}{(\mathbf{k}'_F - \mathbf{k}_F + \mathbf{k}_1)^2 - k_1^2} \quad (2)$$

となる。 n_1 は $T = 0$ のフェルミ分布関数であるので階段関数 $\theta(k_F - |\mathbf{k}_1|)$ ($\theta(x)$ は $x > 0$ のとき 1、それ以外では 0) に他ならない。 \mathbf{k}_1 などを k_F で規格化し、 $\mathbf{q}_1 = \mathbf{k}_1/k_F$, $\mathbf{q} = \mathbf{k}_F/k_F$, $\mathbf{q}' = \mathbf{k}'_F/k_F$ と変数変換すると便利である。また、 $\mathbf{k}'_F - \mathbf{k}_F$ と \mathbf{k}_1 の間の角度の cosine を t_1 とすると、(2) は

$$N(\varepsilon_F) \int_0^1 dq_1 q_1^2 \int_{-1}^1 dt_1 \frac{1}{|\mathbf{q}' - \mathbf{q}|^2 + 2t_1 |\mathbf{q}' - \mathbf{q}| q_1} \quad (3)$$

となる。ここで $N(\varepsilon_F) = m/k_F/2\pi^2$ はフェルミ・エネルギーでの状態密度である。(3) では、 t_1 の積分を実行し、その後で q_1 について積分するだけである。計算は少し長くなるが、最終的に式 (3.53) が得られる。

次に、 f_{\uparrow} については、式 (3.51) の

$$\frac{1}{\Omega} \sum_{\mathbf{k}_1 \mathbf{k}_2} \frac{n_1}{\varepsilon_1 + \varepsilon_2 - 2\varepsilon_F} \delta_{\mathbf{k}_1 + \mathbf{k}_2, \mathbf{k}_F + \mathbf{k}'_F} \quad (4)$$

を計算すればよい。まず、前と同じように、 $\varepsilon_i = \hbar^2 \mathbf{k}_i^2 / 2m$ ($i = 1, 2$) を代入し、すべての波数ベクトルを k_F で測った量 $\mathbf{q}_1 = \mathbf{k}_1/k_F$, $\mathbf{q}_2 = \mathbf{k}_2/k_F$, $\mathbf{q} = \mathbf{k}_F/k_F$, $\mathbf{q}' = \mathbf{k}'_F/k_F$ を使って表すと、(4) は

$$N(\varepsilon_F) \int_0^1 dq_1 q_1^2 \int_{-1}^1 dt_1 \frac{1}{|\mathbf{q} + \mathbf{q}'|^2 - 2 + 2q_1^2 - 2t_1 |\mathbf{q}' + \mathbf{q}| q_1} \quad (5)$$

となる。ここで、 t_1 は $\mathbf{q} + \mathbf{q}'$ と \mathbf{q}_1 の間の角度の cosine である。(5) では t_1 積分を行い、その後で q_1 積分を行えばよい。特別な困難はない。その結果、式 (3.54) が得られる。

2 微視的に見たフェルミ流体 (3.2.3 節) 式 (3.59) と式 (3.60)

まず、式 (3.59) の計算の手順を説明する。 \mathbf{k}_3 についての和はデルタ関数を用い、 \mathbf{k}_1 と \mathbf{k}_2 の和を積分に直し、フェルミ分布関数を階段関数に置き換えると

$$\langle n_{\mathbf{k}\sigma} \rangle^{(2)} = -\frac{U^2 a^6}{(2\pi)^6} \frac{4m^2}{\hbar^4} \int d\mathbf{k}_1 \int d\mathbf{k}_2 \frac{\theta(k_F^2 - (\mathbf{k}_1 + \mathbf{k}_2 - \mathbf{k})^2) \theta(k_1^2 - k_F^2) \theta(k_2^2 - k_F^2)}{(k^2 + (\mathbf{k}_1 + \mathbf{k}_2 - \mathbf{k})^2 - k_1^2 - k_2^2)^2} \quad (6)$$

となる。

\mathbf{k}_1 と \mathbf{k}_2 の代わりに

$$\mathbf{s} = \mathbf{k}_1 + \mathbf{k}_2, \quad \mathbf{q} = \mathbf{k}_1 - \mathbf{k}_2 \quad (7)$$

を導入し、積分を書き直すと便利である。その際、

$$\mathbf{k}_1 = \frac{1}{2}(\mathbf{s} + \mathbf{q}), \quad \mathbf{k}_2 = \frac{1}{2}(\mathbf{s} - \mathbf{q}), \quad d\mathbf{k}_1 d\mathbf{k}_2 = \left(\frac{1}{2}\right)^3 ds d\mathbf{q} \quad (8)$$

に注意する。また、

$$k^2 + (\mathbf{k}_1 + \mathbf{k}_2 - \mathbf{k})^2 - k_1^2 - k_2^2 = \frac{1}{2}(\mathbf{s} - 2\mathbf{k})^2 - \frac{1}{2}\mathbf{q}^2 \quad (9)$$

である。これらを代入すると (6) は

$$\langle n_{\mathbf{k}\sigma} \rangle^{(2)} = -\frac{U^2 a^6}{(2\pi)^6} \frac{4m^2}{\hbar^4} \frac{1}{8} \int ds \int d\mathbf{q} \frac{4}{[(\mathbf{s} - 2\mathbf{k})^2 - \mathbf{q}^2]^2} \times \theta(|\mathbf{s} + \mathbf{q}| - 2k_F) \theta(|\mathbf{s} - \mathbf{q}| - 2k_F) \theta(k_F - |\mathbf{s} - \mathbf{k}|) \quad (10)$$

となる。

以後は、 \mathbf{k} がフェルミ面近くの場合、すなわち、 $\mathbf{k} \rightarrow \mathbf{k}_F$ の場合に限ることにしよう。(10) は \mathbf{k}_F の方向に依らないはずであるから、この段階で \mathbf{k}_F の方向について平均すると後の計算が簡単になる。 \mathbf{k}_F の方向が関係する 2 つの因子は

$$[(\mathbf{s} - 2\mathbf{k}_F)^2 - \mathbf{q}^2]^2 = (s^2 - q^2 + 4k_F^2 - 4sk_F \cos \phi)^2 \quad (11)$$

$$\theta(k_F^2 - |\mathbf{s} - \mathbf{k}_F|^2) = \theta(2k_F \cos \phi - s) \quad (12)$$

と書き直せる。ここで ϕ は \mathbf{s} と \mathbf{k}_F の間の角度である。 $t = \cos \phi$ とおくと、 \mathbf{k}_F の方向に依存する部分の平均は

$$\frac{1}{2} \int_{-1}^1 dt \frac{\theta(2k_F t - s)}{(s^2 - q^2 + 4k_F^2 - 4k_F s t)^2} = \frac{1}{8k_F s} \left(\frac{1}{s^2 + q^2 - 4k_F^2} - \frac{1}{q^2 - (s - 2k_F)^2} \right) \quad (13)$$

となる。ここで、 s は $2k_F$ より小さいことを使っている。よって、(10) は

$$\langle n_{\mathbf{k}\sigma} \rangle^{(2)} \Big|_{\mathbf{k}=\mathbf{k}_F-0} = -\frac{U^2 a^6}{(2\pi)^6} \frac{2m^2}{\hbar^4} \frac{1}{8k_F} \int ds \int d\mathbf{q} \theta(|\mathbf{s} + \mathbf{q}| - 2k_F) \theta(|\mathbf{s} - \mathbf{q}| - 2k_F) \times \frac{1}{s} \left[\frac{1}{s^2 + q^2 - 4k_F^2} - \frac{1}{q^2 - (s - 2k_F)^2} \right] \quad (14)$$

が得られる。

s と q の間の角度 φ についての積分は、 $w = \cos \varphi$ を用いて、

$$\begin{aligned}
& \int_{-1}^1 dw \theta(s^2 + q^2 + 2sqw - 4k_F^2) \theta(s^2 + q^2 - 2sqw - 4k_F^2) \\
&= \int_{-1}^1 dw \theta(A + w) \theta(A - w) \\
&= 2A\theta(1 - A)\theta(A) + 2\theta(A - 1)
\end{aligned} \tag{15}$$

となる。ここで $A = (s^2 + q^2 - 4k_F^2)/2sq$ である。これを代入すると、

$$\begin{aligned}
& \int ds \int dq \theta(|s + q| - 2k_F) \theta(|s - q| - 2k_F) \frac{1}{s} \left[\frac{1}{s^2 + q^2 - 4k_F^2} - \frac{1}{q^2 - (s - 2k_F)^2} \right] \\
&= \int ds \int dq \left[\theta(1 - A)\theta(A) \frac{1}{qs} \frac{2k_F - s}{q^2 - (s - 2k_F)^2} \right. \\
&\quad \left. + \theta(A - 1) \frac{1}{s} \left(\frac{1}{q^2 + s^2 - 4k_F^2} - \frac{1}{q^2 - (s - 2k_F)^2} \right) \right]
\end{aligned} \tag{16}$$

となる。

(16) の右辺第 1 項を $I^{(1)}$ と書くことにする。

$$\begin{aligned}
I^{(1)} &= \int ds \int dq \theta(1 - A)\theta(A) \frac{1}{qs} \frac{2k_F - s}{q^2 - (s - 2k_F)^2} \\
&= (4\pi)^2 \int_0^{2k_F} ds s \int_0^\infty dq q \theta(1 - A)\theta(A) \frac{2k_F - s}{q^2 - (s - 2k_F)^2}
\end{aligned} \tag{17}$$

$1 > A$ 、 $A > 0$ という条件は

$$\begin{aligned}
\theta(1 - A)\theta(A) &\rightarrow \theta(s - q)\theta\left(q - \sqrt{4k_F^2 - s^2}\right) \\
&\quad + \theta(q - s)\theta(s + 2k_F - q)\theta\left(q - \sqrt{4k_F^2 - s^2}\right)
\end{aligned} \tag{18}$$

とも表わせることに注意し、最初に q について積分し、その後 s について積分すればよい。積分の結果は

$$I^{(1)} = 2\pi^2 k_F^3 \left(\frac{4}{3} \log 2 + \frac{10}{9} \right) \tag{19}$$

といなる。

次に、(16) の右辺第 2 項を $I^{(2)}$ と書き、この量を計算する。 $I^{(2)}$ は

$$\begin{aligned}
I^{(2)} &= \int ds \int dq \theta(A - 1) \frac{1}{s} \left(\frac{1}{q^2 + s^2 - 4k_F^2} - \frac{1}{q^2 - (s - 2k_F)^2} \right) \\
&= (4\pi)^2 \int_0^{2k_F} ds s \int_0^\infty dq q^2 \theta(A - 1) \left(\frac{1}{q^2 + s^2 - 4k_F^2} - \frac{1}{q^2 - (s - 2k_F)^2} \right) \\
&= (4\pi)^2 \int_0^{2k_F} ds s \int_0^\infty dq \theta(A - 1) \left(\frac{4k_F^2 - s^2}{q^2 + s^2 - 4k_F^2} - \frac{(s - 2k_F)^2}{q^2 - (s - 2k_F)^2} \right)
\end{aligned} \tag{20}$$

であるが、 $A > 1$ という条件は

$$\theta(A - 1) \rightarrow \theta(q - s)\theta(q - s - 2k_F) \quad (21)$$

である。(20) の第 1 項では最初に s について、その後で q について積分する。他方、第 2 項では最初に q 、その後で s について積分するのが便利である。積分を実行すると

$$I^{(2)} = 2\pi^2 k_F^3 \left(\frac{8}{3} \log 2 + \frac{2}{9} \right) \quad (22)$$

が得られる。 $I^{(1)}$ と $I^{(2)}$ の和は

$$I^{(1)} + I^{(2)} = 8\pi^2 k_F^3 \left(\log 2 + \frac{1}{3} \right) \quad (23)$$

となる。これから式 (3.61) が得られる。

式 (3.60) の計算も同じような手順で行えばよい。

3 相互作用の効果一局所フェルミ流体 (4.4.2 節) 式 (4.87)

式 (4.71) の積分を実行する。準備として、次の関数を定義しておこう。

$$G_0(i\varepsilon) = \int_{-\infty}^{\infty} dx \frac{N_d(x)}{i\varepsilon - x} \quad (24)$$

$$N_d(x) = \frac{1}{\pi} \frac{\Delta}{x^2 + \Delta^2} \quad (25)$$

式 (24) の i は虚数単位、 ε は実数である。式 (24) の $G_0(i\varepsilon)$ は、積分を実行すると

$$G_0(i\varepsilon) = \frac{\theta(\varepsilon)}{i\varepsilon + i\Delta} + \frac{\theta(-\varepsilon)}{i\varepsilon - i\Delta} \quad (26)$$

であることがわかる。 $\theta(\varepsilon)$ は階段関数で、 $\varepsilon > 0$ のとき $\theta(\varepsilon) = 1$ 、 $\varepsilon < 0$ のとき $\theta(\varepsilon) = 0$ である。 $G_0(i\varepsilon)$ は $\varepsilon = 0$ で跳びがある関数である。

次に、積 $G_0(i\varepsilon' + i\varepsilon)G_0(i\varepsilon)$ の ε についての積分を考える。ここでも ε' は実数である。定義 (24) より、

$$\begin{aligned} & \int_{-\infty}^{\infty} \frac{d\varepsilon}{2\pi} G_0(i\varepsilon' + i\varepsilon)G_0(i\varepsilon) \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} dx_1 \int_{-\infty}^{\infty} dx_2 N_d(x_1)N_d(x_2) \int_{-\infty}^{\infty} \frac{d\varepsilon}{2\pi} \frac{1}{(i\varepsilon' + i\varepsilon - x_1)(i\varepsilon - x_2)} \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} dx_1 \int_{-\infty}^{\infty} dx_2 N_d(x_1)N_d(x_2) \frac{\theta(x_1)\theta(-x_2) - \theta(-x_1)\theta(x_2)}{i\varepsilon' - x_1 + x_2} \end{aligned} \quad (27)$$

が得られる。さらにもう一つ $G_0(i\omega + i\varepsilon')$ を掛けて、 ε' について積分すると、

$$\begin{aligned} & \int_{-\infty}^{\infty} \frac{d\varepsilon'}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{d\varepsilon}{2\pi} G_0(i\omega + i\varepsilon') G_0(i\varepsilon' + i\varepsilon) G_0(i\varepsilon) \\ &= - \int_{-\infty}^{\infty} dx_1 \int_{-\infty}^{\infty} dx_2 \int_{-\infty}^{\infty} dx_3 N_d(x_1) N_d(x_2) N_d(x_3) \\ & \quad \times \frac{\theta(x_1)\theta(-x_2)\theta(-x_3) + \theta(-x_1)\theta(x_2)\theta(x_3)}{i\omega - x_1 + x_2 + x_3} \end{aligned} \quad (28)$$

となる。さらに、 $N_d(x)$ が x の偶関数であることを利用すると

$$\begin{aligned} \text{上式} &= - \int_0^{\infty} dx_1 \int_0^{\infty} dx_2 \int_0^{\infty} dx_3 N_d(x_1) N_d(x_2) N_d(x_3) \\ & \quad \times \left[\frac{1}{i\omega - x_1 - x_2 - x_3} + \frac{1}{i\omega + x_1 + x_2 + x_3} \right] \end{aligned} \quad (29)$$

が得られる。この式の両辺から ω の 1 次の項を取り出せば

$$\begin{aligned} & \lim_{\omega \rightarrow 0} \frac{\partial}{\partial(i\omega)} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{d\varepsilon'}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{d\varepsilon}{2\pi} G_0(i\omega + i\varepsilon') G_0(i\varepsilon' + i\varepsilon) G_0(i\varepsilon) \\ &= 2 \int_0^{\infty} dx_1 \int_0^{\infty} dx_2 \int_0^{\infty} dx_3 \frac{N_d(x_1) N_d(x_2) N_d(x_3)}{(x_1 + x_2 + x_3)^2} \end{aligned} \quad (30)$$

が得られるが、右辺は式 (4.71) の積分に他ならない。よって、左辺を計算すればよい。

$G_0(i\varepsilon)$ は、式 (26) のように、 $\varepsilon = 0$ で跳びのある関数であることに注意すると、

$$\lim_{\omega \rightarrow 0} \frac{\partial}{\partial(i\omega)} G_0(i\omega + i\varepsilon') = -[G_0(i\varepsilon')]^2 - \frac{2}{\Delta} \delta(\varepsilon') \quad (31)$$

である。これを (30) の左辺に代入する。式 (31) の右辺の第 1 項の寄与を A 、第 2 項の寄与を B としよう。 B は

$$B = -\frac{1}{\pi\Delta} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{d\varepsilon}{2\pi} [G_0(i\varepsilon)]^2 = \frac{1}{(\pi\Delta)^2} \quad (32)$$

と容易に求まる。 A は

$$A = - \int_{-\infty}^{\infty} \frac{d\varepsilon'}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{d\varepsilon}{2\pi} [G_0(i\varepsilon')]^2 G_0(i\varepsilon' + i\varepsilon) G_0(i\varepsilon) \quad (33)$$

であるが、 ε についての積分は

$$\int_{-\infty}^{\infty} \frac{d\varepsilon}{2\pi} G_0(i\varepsilon' + i\varepsilon) G_0(i\varepsilon) = -\frac{2\Delta}{\pi|\varepsilon'|(|\varepsilon'| + 2\Delta)} \log\left(\frac{|\varepsilon'| + \Delta}{\Delta}\right) \quad (34)$$

である。これを (33) に代入して、 $\varepsilon'/\Delta = x$ と変数変換すると、

$$\begin{aligned} A &= -\frac{2}{(\pi\Delta)^2} \int_0^{\infty} dx \frac{1}{(x+1)^2 x(x+2)} \log(x+1) \\ &= -\frac{2}{(\pi\Delta)^2} \int_0^{\infty} dt \frac{te^{-3t}}{1 - e^{-2t}} \end{aligned} \quad (35)$$

と表せる。ここで、 $x + 1 = e^t$ と置き換えている。残る積分は簡単で

$$A = -\frac{2}{(\pi\Delta)^2} \sum_{n=0}^{\infty} t e^{-(2n+3)t} = -\frac{2}{(\pi\Delta)^2} \left(\frac{\pi^2}{8} - 1 \right) \quad (36)$$

である。ここで $\sum_{n=0}^{\infty} (2n+1)^{-2} = \pi^2/8$ を用いた。

A と B を加えると

$$A + B = \frac{1}{(\pi\Delta)^2} \left(3 - \frac{\pi^2}{4} \right) \quad (37)$$

となる。こうして式 (4.87) の結果が得られる。

[以上 2010 年 4 月 30 日 記す]